



川瀬巴水《旅みやげ第一集
房州岩井の浜》大正9年(1920)



館長のつれづれコレクション案内 浮世絵に新時代をもたらした小林清親の「江戸橋夕暮富士」



小林清親 「江戸橋夕暮富士」 明治12年(1879) 横大判錦絵 26.2×37.0cm

19世紀後半から欧米に広がった日本趣味の火付け役は浮世絵であったと言われていいます。西洋美術にはない構図や形、洗練された線、色の鮮やかさが人々を魅了し、これほど質の高い美術品が大量の手に渡っていることが驚きをもって迎えられ、「芸術の国・日本」のイメージにつながっていきました。浮世絵はその名の通り、移り変わる世を写すもの。江戸から明治への世の移り変わりの中で、人々の眼の欲望に応じて、幕末の動乱を描き、次々にもたらされる開化の様相をとらえた浮世絵が流布します。その中

で、明治9年(1876)、西洋的な光の表現を活かし、江戸の名残と開化の足音を感じさせる独自の画風で登場したのが小林清親です。浮世絵から近代版画への橋渡しをしたひとりでもあり、大正期に新版画運動を起こした版元渡邊庄三郎も清親を高く評価していました。

小林清親は弘化4年(1847)8月1日、御蔵方小揚頭取小林茂兵衛の第九子として浅草御蔵屋敷に生まれました。文久2年(1862)10月に父が亡くなると末子ながら家督相続し、十四代將軍家茂の上洛の際には幕臣として従い、

慶応4年(1868)1月の鳥羽伏見の戦いおよび同年5月の上野戦争に参加。当時としては稀な長身(六尺五分=約182センチ)でありながら、上野の戦で斥候となった折には、身を隠していた用水桶に鉄砲が当たったのに臆して逃げ帰ったと自らの来し方を描いた絵巻に記しています。明治3年(1870)に最後の將軍徳川慶喜が静岡に下るのに従い、その後、榊原健吉という剣豪が主導する剣術一座に加わり巡業。幕藩体制崩壊により生活基盤を失った旧幕臣の困窮が感ぜられます。その後、イラストレイテッド・ロンドン・ニューズの報道画家として来日していた英国人チャールズ・ワーグマンに絵を学び、また、河鍋暁齋、柴田是真らに学んだとされますが、絵はほぼ独学で、いずれの画派にも属さず、当時としては先駆的な光の表現で注目されました。

「江戸橋夕暮富士」もその一点。画面中央の富士山のシルエットと入道雲に眼を奪われます。その入道雲の輪郭線と松の幹および右下の男性のシルエットの背中輪郭線が呼応し、構図にリズムをもたらしています。橋のたもとにガス灯が松の枝と「ゑ登は(し)」という文字を明るませ、右下の道にともされた街灯が開化の様を表す一方で、川面に映って揺れる民家の灯、川岸に舫う多くの舟、そして夕焼けを残しつつ暮れていく夏の日の薄暮の光は江戸の昔と変わらない趣です。

江戸橋は17世紀半ばに架橋されたと考えら

れており、昭和2年(1927)に現在の位置に架けられる前はより下流、日本橋より東京湾側にありました。明治8年(1875)5月に石橋に、明治34年(1901)に鉄橋に替わっており、「江戸橋夕暮富士」の制作は石橋になってから。画中の富士山の位置から推して、清親は江戸橋の北詰のたもとに立ち、南西方向を見て描いたと思われる。画面右側が日本橋で蔵が立ち並んでいます。この作品では川向こうに当たる橋の南西側の岸は木更津と江戸をむすぶ船便が発着して木更津河岸と呼ばれ、船宿が並び、漁船や乗り合い舟でにぎわったといえます。

清親は「光線画」と呼ばれたこうした作品を明治14年(1881)以降は描かなくなります。同年1月26日および2月11日の神田、四谷の大火で江戸の街並みが灰燼に帰したことが理由のひとつではないかとされますが、「四民平等」をめざしたはずの新政府のあり方に疑問を抱いたのも一因であったようです。その後、「團圓珍聞」などの風刺画で活躍しますが、明治18年(1885)から刊行された「武蔵百景」は歌川広重の「名所江戸百景」の構図を踏まえ、江戸情緒への郷愁を強く感じさせるものとなっています。

開化の様を描くものの江戸の面影が色濃い「江戸橋夕暮富士」は、西洋化を受け入れつつも生涯変わらなかった清親の江戸への思いを表しているようです。

【館長 山梨絵美子】

新版画

の美

UKIYO-E

進化系

担当学芸員インタビュー

「新版画 進化系UKIYO-Eの美」は、千葉市美術館のコレクションから構成される展覧会です。全国的にもめずらしい、当館の特徴とも言える豊富な新版画コレクションを、はじめて一挙にご覧いただける機会。担当学芸員に、開催の経緯や展覧会の見どころをインタビューしました。



川瀬巴水 《東京十二月 谷中の夕映》 大正10年(1921)

—「新版画」とは、どのような作品を指すのでしょうか。

新版画とは、浮世絵版画の技と美意識を継承すべく、大正初年から昭和のはじめにかけて盛り上がったジャンルです。版元・渡邊庄三郎が始め、昭和に入ってからたくさんの版元が参入し、大きな流れとなりました。浮世絵から連なる伝統的な彫りや摺りの技術に、同時代の画家による新たな表現が組み合わせられているところが特徴です。

—新版画という言葉自体も、定着してきているように感じます。

以前よりは、認知も高まっているのではないのでしょうか。ここ20年くらいで、全国各地で展覧会が開催されています。アメリカでも人気が高く、「UKIYO-E」と同じように「SHIN-HANGA」も固有名詞として定着しつつあるようです。また、アニメーションやイラストレーションと重ねて語られることもあり、現代のムードに合致しているようにも感じます。

—そんな新版画の展覧会が、千葉市美術館のコレクションを使って開催されることになりました。

数年前に、日本経済新聞社さんから、千葉市美術館のコレクションによる新版画展を企画したいというお声かけがありました。コレクションが一本の展覧会になるのは、とてもうれしいことです。日本橋高島屋、大阪高島屋、そして山口県立萩美術

館・浦上記念館で開催が決まり、せっかくの機会なので、当館でも開催することになりました。

—出品作品は、当館のコレクションだけで構成されています。

そうですね。これまで、橋口五葉(2011年)、川瀬巴水(2013年)、吉田博(2016年)と、新版画を手がけた作家の回顧展は何度か開催してきましたが、「新版画」という全体のくりでは、多くのコレクションがありながら、企画展としてまとめてご紹介するのは今回がはじめてです。

—当館が所蔵する新版画は、どのように収集されてきたのでしょうか。

当館のコレクションは、浮世絵から始まっています。その浮世絵が、近代に入ってどのように変遷していったかを知るために、浮世絵以降の版画、つまり新版画や創作版画の収集が始まりました。近代版画を収集している美術館は少ないので、浮世絵とともに当館のコレクションの特徴になっています。とくに新版画で言えば、主要な作家や作品がまんべんなく集まっています。ここまで収集している美術館は、全国的にもめずらしいです。

—当館の新版画コレクションには、なにか特徴があるのですか。

橋口五葉が、生前自ら監督した作品がすべて所蔵されています。また、比較的早い時期の作品が多いことも特徴です。関東

大震災で、渡邊版は版木がすべて焼失しているため、震災以前の作品は貴重なんですね。そういった点で、初期の作品が多くあることは、いい特徴だと思います。

—今回の展覧会では、27名の作家による、約240点の作品が展示されます。

当館のコレクションを、歴史や版元に沿って、ひとつの流れのなかでご紹介する内容になっています。また、巡回展の内容に加え、当館のみの構成として、ヘレン・ハイドとバーサ・ラムを展示します。ふたりは、明治末期に来日し、日本の職人とともに木版画を制作した、新版画の前身に位置する作家です【図1、2】。

—章立てを見ると、版元の存在が展覧会の核になっているようです。

ひとえに、新版画を生んだ版元・渡邊庄三郎が偉大だったこともあるのですが、その後も追隨する版元が出てきて、それぞれに個性的な仕事をしました。とくに、京都の佐藤章太郎版は、独特の色使いをしていて魅力的です【図3】。佐藤章太郎と画家の吉川観方が、京都の伝統的な木版画を再興すべく始めました。ねっとりとした雰囲気、京都の色づくりなのだろうと想像できます。

—一方で、版元にとらわれない作家もいたのでしょうか。

版元の特徴に左右されず、自分の作りたいように作るために、自らが版元となり

「私家版」を制作した作家がいます。橋口五葉【図4】や吉田博【図5】は、その代表的な作家ですね。さきほど少しご紹介した、橋口五葉が自ら監督した私家版の作品は、今回の展覧会で全点ご覧いただけます。

—担当学芸員としては、新版画の魅力はどのようなところにあると思いますか。

新版画が始まったころが、一番おもしろく感じます。これまでにないものを作ろうと、日本の版元と同時代の外国人の画家がタッグを組み、日本の筆でどこか新しい線を引かせ、それを木版画にする。初期の作品には、そういう異文化がスパークするようなところがあり、実験的でおもしろいと思いますね【図6】。ひとくちに新版画と言っても、年代や作家や版元によってまったく違ってくるんです。

—最後に、今回の展覧会の見どころをお聞かせください。

浮世絵と新版画の徹底的に異なるところは、「画家の個性を出す」というところですね。浮世絵の時代とは違って、ばれんのあとを残したり、輪郭線をゴツゴツさせてみたりと、意識的に木版画の良さを出そうともしている。「これは版の絵ですよ」と、あえて主張しているんですね。これは、図版ではなかなかわかりづらく、実物でないと見えない部分なので、ぜひ会場へ見に来ていただけたら嬉しいです。

[話し手: 首席学芸員 西山純子]



【図1】



【図2】



【図3】



【図4】



【図5】



【図6】

- 【図1】ヘレン・ハイド《かたこと》明治41年(1908)
- 【図2】バーサ・ラム《川面にて》明治44年(1911)
- 【図3】山田美穂《八坂の舞妓》大正13年(1924)
- 【図4】橋口五葉《髪梳ける女》大正9年(1920)
- 【図5】吉田博《大原海岸》昭和3年(1928)
- 【図6】フリッツ・カペラリ《鏡の前の女(立姿)》大正4年(1915)

「新版画 進化系UKIYO-Eの美」

会期 2022年9月14日[水]～11月3日[木・祝]

会場 8・7階 企画展示室

休室日 10月3日[月]、11日[火]

詳細はホームページよりご覧ください

